

だより

第25号 / 平成30年6月22日発行

ぶんきょう散歩 一本郷・小石川の史跡探訪— 2

収蔵庫に住む‘いきもの’たち 4

根津の文人 朗月亭羅文
—三遊亭円朝の伝記— 6

平成29年度のあゆみ 7

平成30年度の催し 8



「江戸廻花名勝会 氷川下」(館蔵)

ぶんきょう散歩

一本郷・小石川の史跡探訪

水行・陸行 —先史・原始時代の人々と旅—

むかしむかし。わたしたちの祖先が徒歩以外の交通手段として丸木舟しか持たなかった縄文時代の頃^{※1}、洋上遥かな伊豆諸島、あるいは険峻な中部山岳地帯から石器の素材となる黒曜石を携えて人々がやって来たことが、産出地ではない関東地方の遺跡で黒曜石の石器が出土していることからわかります。

司馬遼太郎が生前に残した、旅にまつわるエッセイに、「本来、旅には生死の危険を覚悟してでも出ねばならないほどの目的があったはずだが、やがて旅そのものが目的になった」^{※2}という言葉があります。時に命を賭した旅であったにも関わらず、時代が推移するにつれ、中国大陸や朝鮮半島などの往来が活発に、そして継続的に行われるようになりました。

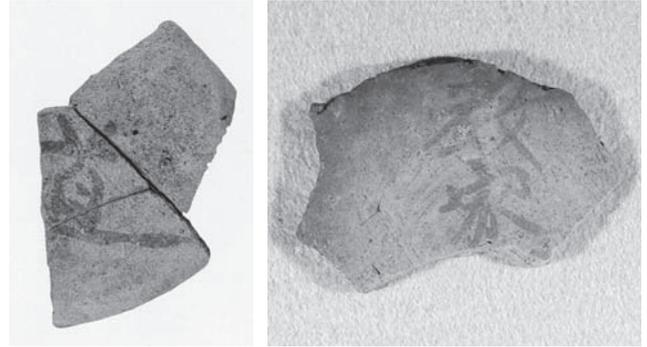
文字に現れる旅の記録としては弥生時代、『魏志倭人伝』と通称される史料に遡ります。「鯨面文身」(顔から全身に施された刺青の意)を始めとする風俗習慣や、ヤマタイ国への旅程「水行三十日、陸行一月」の解釈を巡っては、九州説、畿内説を中心に様々な議論があり、日本単独ではなく南洋の島々の伝聞も混在した情報ではないかとされ、古代史上の謎の一つです^{※3}。いずれにせよ海図や羅針盤、GPSやナビゲーションシステムもなく、航空機も高速船舶も存在せず、生身の体で過酷な気象条件に晒される旅の危険性や困難度は現代のそれと比較になりません。紀元前後の時代に、東海の列島弧である日本と中国大陸との間で、交流や交易が行われていたことは、まさに驚愕に値することです。

“道” —古代の文京—

中国の歴代王朝の政治体制を模範とした奈良～平安時代、平城京や平安京などの都の建設にあたり、都市構造には条里制を、交通網には駅制を採用しました。政治の中心地、畿内と各地方は、現在の国道に相当する官道で結ばれました。近年、各地方で古代の道路跡が確認されており、国家事業としての幹線道路網の整備の実態が判明しつつあります^{※4}。

武蔵国豊島郡の一部にあたる当時の文京区域は、古文書に「湯島郷」や「日頭郷」の地域名しか記されないため、1960年代に刊行された『文京区史』などでは、“律令制度下の文京区は、政治や文化の中心地である畿内から遠く離れた辺境の地、草深い未開の土地だった”という論調に終始しています。しかしながら1980年代以降に発掘調査が増加した結果、興味深い資料が出土しました。現在の本郷1丁目、同4丁目の遺跡から出土した土器の表面には、「道」そして「教家」の文字が墨で認められています。漢字1字あるいは2字だけで、その意味を詳らかにするのは困難ですが、少なくとも当時の文京区域には文字を理解し、書くことのできる能力を持つ人々が存在

していたことの証であり、“人跡まばらな寒村”という一元的な理解で断ずる事は避けなければなりません^{※5}。



弓町遺跡出土の墨書土器「道」、真砂町遺跡出土の「教家」

地図をつくる旅 —始めようか、天体観測—

「月日は百代の過客にして 行き交う年も また 旅人なり」。正保元年(1644)、伊賀国に生まれた松尾芭蕉は、関東～東北地方を旅し『奥の細道』を著しました。名所や旧跡を訪ね歩く旅の楽しみを教えてくれた紀行文学の魁です。芭蕉は一時、関口大洗堰近傍(現在の文京区関口)に住まいし、神田上水の工事を指揮したとされる、文京ゆかりの俳人です。



現在の関口芭蕉庵

錦絵『名所江戸百景せき口 上水端はせを庵橋山』

一方で江戸時代は、大大名から庶民に至るまで、現在の様には自由気儘な旅行はできず、霊峰・富士に代表される山岳信仰目的の登山や、著名な神社仏閣への参拝など、旅の目的や条件は限定されていました。その一つ伊勢参りに犬が参拝の旅に出たという逸話があります。

現代でも稀に、迷子の犬や猫が途方もない距離を移動して家族の元に戻ったという話題に驚かされることがあります。しかし動物が、自発的に目的意識をもって神社を参拝するとは俄に信じられません。司馬遼太郎は、犬の参拝事情には諸国からの伊勢参りの促進役を担った「御師」達が主導した話題づくりが根底にあるものと推察しています^{※6}。犬も歩けば神社に詣でる。お話自体としては、とても楽しくはあるのですが…。

下総国佐原の店の入り婿となった伊能忠敬は、49歳で家督を息子に譲り、勸解由と号して寛政6年(1794)江戸深川に隠居します。忠敬は幕府天文方の高橋至時に弟子入りし、

深川の自宅から毎日、天文台の所在地、浅草に通いました。歩測によって深川と浅草の距離を正確に割り出した忠敬は、緯度一度の距離を確認したいという知的欲求を抱き、測量に基づいてそれを確認するため、師の至時に相談の上、蝦夷地(現在の北海道)への測量作業許可を幕府に願い出ます。

紆余曲折を経た寛政12年、第一次伊能測量隊の一行5名は深川を出発、一路、蝦夷地へと向かいました。その成果は、師の至時の期待を遥かに上回る精度を持っており、幕府から程なく第二次測量の許可を得て、自費での測量作業から、公金を下賜される公共事業となり、文化13年(1816)の第九次測量まで数えました。

現在の文京区域は、この第九次測量による江戸府内の測量時に踏査されています。忠敬の測量は、科学的な精度としての評価に加えて、隠居後の60~70代での業績とが相まって、近年の熟年世代の社会貢献活動、活躍の魁であるとされます。昼は測量、夜は天体観測による経緯度(座標)の確認と、昼夜を厭わぬ、その活力は、まさに瞠目するばかりです。

『大日本沿海輿地全図』、通称『伊能図』は、日本列島の位置が東北地方の北部で、経度が西側に若干ぶれている以外には、ほぼ誤りがなく、幕末~明治維新时期に英国の測量隊が日本の沿岸測量を企図した時に伊能図を示され、その精度に感嘆し、測量作業を行わずに伊能図の複写を持ち帰ったという逸話が伝えられています^{*7}。



芝公園内の伊能忠敬顕彰碑

文京ゆかりの文人達 散歩と旅

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。(中略) 越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛容で、東の間の命を、東の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。」^{*8}という夏目漱石の『草枕』にある通り、数多の作家や文人が、日々の暮らしの中での散歩や散策、そして日常から解放された旅で創造性を高め、新たな発見を見出し、珠玉の名作を著してきました。

永井荷風は、明治~大正年間の市区改正事業(現在の都市計画に相当)で、古き良き町並みが急速に失われてゆく様を『日和下駄』で描写し^{*9}、随筆では出身地の小石川(現在の文京区春日2丁目)なども取り上げています。第一高等学校(現・東京大学教養学部)から帝国大学法科大学(現・東京大学法学部)に学び、第一高等学校在学中は学内の寮に寄宿した大佛次郎もまた、旅に関する随筆を著しています^{*10}。東京へ出稼ぎに来ていた父親を頼り、富山から上京して文京区内に暮らした水上勉は回想記で文京区との名残を愛しみ^{*11}、東京大学を卒業後、脚本家として一世を風靡した木下順二も、生を受けた“本郷”の地を、終生、こよなく愛した一人です^{*12}。

司馬遼太郎の『街道をゆく』と文京

司馬遼太郎は、小説の筆を折った後もライフワーク『街道をゆく』を著しました。26年に及ぶ探訪記は「スジメ正しき野武士あがり」を自称する新聞記者の視点や姿勢、つまる所、自らの足で行動し、自身の眼で観察することを基本的な立場として重視し、少年~青年期に学校教育に違和感を覚え、図書館通いを日課とし、所蔵図書は、雑誌から辞典に至るまで全て読破してしまったという広範な知識に裏付けられた筆致には定評があります。

司馬は『街道をゆく 本郷界限』で^{*13}、敬愛して止まない夏目漱石や正岡子規の作品世界を育んだ文京区の“本郷”の地に特別な思い入れを抱き、この地をして「文化の配電盤」とさえ評しています^{*14}。

平成30年度の特別展は、街道を往来し路地裏をめぐる視点から、文京区の史跡や文化財を紹介します。題して、『ねこの細道・さんぽ道一ぶんきょう道中ひげ栗毛一』。

ご来館をお待ちしております。

(加藤 元信)

註

- ※1 出口昌子 2001 『ものと人間の文化史98 丸木舟』法政大学出版局
- ※2 司馬遼太郎 2002 「集団の旅の型」『司馬遼太郎が考えたこと』11新潮社
- ※3 佐原 真 1997 『魏志倭人伝の考古学』歴史民俗博物館振興会
渡邊義浩 2012 『魏志倭人伝の謎を解く 三国史からみる邪馬台国』中央公論新社
- ※4 古代学協会編 2000 『道路遺構等確認調査報告』東京都教育委員会
- ※5 加藤元信ほか 2000 『弓町遺跡発掘調査報告書』文京区遺跡調査会
“ ” 2003 『真砂町遺跡第V地点』文京区遺跡調査会
- ※6 司馬遼太郎 1985 『街道をゆく26 仙台・石巻』朝日新聞社
- ※7 星埜由尚 2010 『日本史リブレット人057 伊能忠敬』山川出版社
保柳睦美 1974 『伊能忠敬の科学的業績』古今書院
- ※8 渡辺一郎 2000 『図説伊能忠敬の地区をよむ』河出書房新社
- ※9 夏目漱石 1914 『草枕』春陽堂 ※1951 角川文庫版
- ※10 永井荷風 1915 『日和下駄』靑山書店
- ※11 大佛次郎 2002 『大佛次郎隨筆集 旅の誘い』講談社
- ※12 水上 勉 1996 『私版東京図絵』朝日新聞社
- ※13 木下順二 1983 『本郷』講談社
- ※14 司馬遼太郎 1992 『街道をゆく37 本郷界限』朝日新聞社
- ※15 朝日新聞社編 1996 『司馬遼太郎の遺産 街道をゆく』朝日新聞社
- ※16 司馬遼太郎 2007 『街道をゆく夜話』朝日新聞社

収蔵庫に住む ‘いきもの’たち

ふるさと歴史館では、多くの資料を収集し、保存しています。絵画、古文書、写真、民具など、様々な物が収蔵庫にはあります。それらの資料をよく見ると、‘いきもの’と関係のある物のあることに気づきます。その中から、イヌ、ネコ、チョウ、ニワトリに関する資料をご紹介します。

イヌの資料は、【図1】「小石川にしとみ坂の図」です。この浮世絵は、歌川広景によって描かれ、安政6年(1859)12月に発行されました。「江戸名所道戯尽」とするシリーズ50枚の内の1枚です。この頃の「にしとみ坂」の道筋は、現在の礪川公園を通り、中央大学理工学部に抜けていたと考えられます。棒手振りが急な坂道の途中でイヌの喧嘩に足元を取られ、果物を道にばらまいてしまいました。それを拾うのに集まった人—転んだり、果物を口に入れたり—、この様子を見ているイヌも描かれています。坂道で起こった一瞬のできごとが、写真のように切り取られています。この絵が描かれた当時、江戸の町にイヌがどの位いたのかはわかりませんが、天保8年(1837)から慶応3年(1867)に、江戸、京都、大坂の違いを比較して書いた随筆『守貞謄稿』では、次のようにあります。

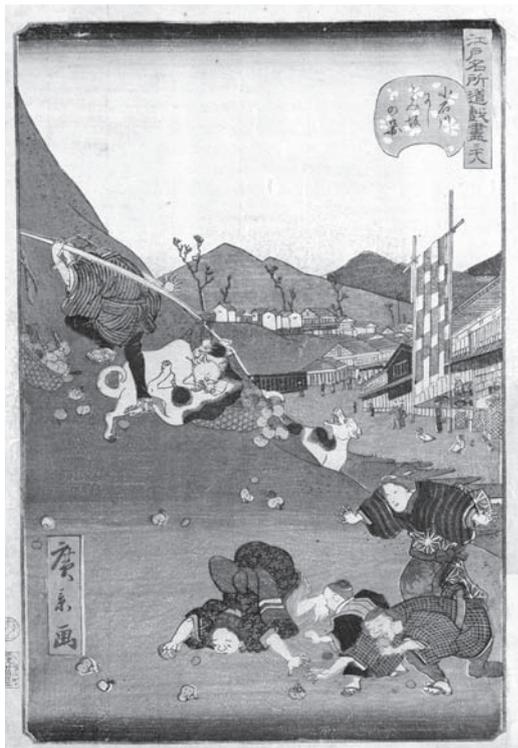
江戸にては、武家および市中稲荷祠ある事、その数知るべからず。…諺に、江戸に多きを云ひて、伊勢屋・稲荷に犬の糞、と云ふなり。

江戸に稲荷の多いことを説明するのに、「伊勢屋」と「犬の糞」が引かれています。江戸には、イヌのフンがたくさん落ちていたことがわかります。浮世絵のイヌは、首輪や鎖などを着けておらず、町中を自由に歩き回っていたようです。このようなイヌのしたフンを、『守貞謄稿』では、江戸に多いものと挙げているのではないのでしょうか。

文京区とネコの関わりでよく知られているのは、夏目漱石の『吾輩ハ猫デアル』でしょう。漱石は、明治36年(1903)から39年まで本郷区千駄木町57番地に住み、この小説を執筆しました。この小説は明治38年1月の『ホトギス』第八巻第四号に掲載され、翌年8月まで続きました。その間、38年10月には、上編が出版されました。その出版にあたり、装丁を橋口五葉に依頼しました。『吾輩ハ猫デアル』は、漱石が最初に出版した本であり、五葉が最初に装丁を手がけた本でもありました。二人が一緒に仕事をするきっかけは、漱石が熊本の第五高等学校に勤務していた時に、五葉の兄・貢と知り合い、その後、貢が五葉を漱石に紹介したからでした。漱石は38年8月9日のはがきで『吾輩ハ猫デアル』の装丁について書いています。

昨夜は失礼致候其節御依頼の表紙の義は矢張り玉子色の
とりの子紙の厚きものに朱と金にて何か御工夫願度先は右
御願迄 勿々拜具

漱石は、本の表紙【図2】について使う紙や色について指定しています。表紙は、このはがきの指定通り、ネコの絵が朱色で、表題が金色になっています。



【図1】小石川にしとみ坂の図



【図2】『吾輩ハ猫デアル』表紙

日 常で使っている物の中には、‘いきもの’と形状が似ているため、その名前が付いている物があります。【図3】の人物は、花柳章太郎で蝶ネクタイを締めています。

花柳章太郎(1894~1965)は、明治末から昭和にかけて活躍した新派の俳優で、本郷区湯島天神下同朋町に住み、練雪小学校、湯島小学校、本郷高等小学校に通った、文京ゆかりの人物です。ふるさと歴史館には、花柳章太郎の蝶ネクタイが所蔵されています。

蝶ネクタイは、ネクタイの中でも蝶結びにしたもので、チョウの形に似ています。昭和11年(1936)9月12日「東京朝日新聞」朝刊の「何でも御座れ即座に解決」という投稿欄には、次の質問があります。

ネクタイの結び方は三十余通りあるさうですが、そのうち現今の若い人が最も好む結び方を数通りお教え下さい

この回答では、「最新式の蝶結び」として蝶ネクタイの結び方を二種類、図を交えて紹介しています。昭和15年の「読売新聞」では、普通のネクタイを再利用して、蝶ネクタイを作る方法も書かれています。また、「読売新聞」昭和27年7月1日の夕刊では、夏のネクタイについて次のような記事があります。

普通のネクタイの他、夏用にはサマータイ、ウオッシュェブルタイがあり、また蝶ネクタイも軽快さが喜ばれるのか、夏の方が需要が多い。

これによると夏に蝶ネクタイが好まれていたようです。他にも、新聞には、蝶ネクタイの流行、結び方や作り方の記事があることから、花柳の生きていた頃は、今よりも蝶ネクタイをする人が多かったのではないのでしょうか。



【図3】花柳章太郎

地 名の中にも、‘いきもの’は出てきます。ニワトリが出ていのは、嘉永7年(1854)発行の「東都駒込辺絵図」です。【図4】は、その一部です。土井大炊頭と土井大隅守の屋敷の間に「此辺ケイセイカクホ」と書かれています。「ケイセイカクホ」とは、『江戸砂子温故名跡誌』によると、「鶏声が窪」とあり、その名前の由来について、紹介しています。

おおいのかみ おおすみのかみ
むかし土井大炊頭利勝の御やしきの辺、夜ごとに鶏の声あり、あやしみてその声をしたひてその所をもとむるに、利勝の御やしきの内、地中に声あり、その所をうがち見るに、金銀のにはとりを堀出せり、よつてかく名に成りたるといふ。

土井利勝(1573~1644)の頃に、屋敷の辺りで夜になるとニワトリの声が聞こえるので、あやしんでその声の元を探すと、利勝の屋敷の地中からニワトリの声がしたので、そこを掘ると、金銀のニワトリが出てきたので、「鶏声が窪」としたとあります。金銀のニワトリが掘り出された話によって、「鶏声が窪」の名前が付き、絵図にも「ケイセイカクホ」と書かれるようになったのでしょう。

収蔵庫の中を探すと、本文で紹介したほかにも様々な‘いきもの’が住んでいます。平成30年度の収蔵品展では、収蔵庫に住む‘いきもの’をテーマに、ふるさと歴史館館蔵資料の新しい魅力をご紹介します。(齊藤 智美)

【図4】東都駒込辺絵図(部分)



【図4】東都駒込辺絵図(部分)

【参考文献】 喜田川守貞『近世風俗志(守貞謄稿)』四 2001年 岩波文庫
夏目金之助『漱石全集』第二十二巻 1996年 岩波書店
小池章太郎編『江戸砂子』1976年 東京堂出版

根津の文人 朗月亭羅文

—三遊亭円朝の伝記—

日本で近代小説が書かれるようになった明治中頃に、根津で生まれ育った文人がいました。名前は瀧澤慎八郎(1863-1891)、綾垣羅文、朗月亭羅文、月の屋主人などの筆名で活動しました。その活動時期は短く、明治20年(1887)頃に仮名垣魯文の“いろは連”に参加して綾垣羅文の名前をもらい、根岸党と呼ばれた饗庭篁村(1855-1922)や幸田露伴(1867-1947)らと行動をともにしましたが、明治24年8月18日に29年の生涯を終えました。特に幸田露伴とは親しく、露伴が代表作『五重塔』を書いた谷中の家に、一時期羅文も居候をしていました。

露伴は、「朗月亭羅文」と題した掌編を2本発表しています。1つは明治34年刊行の『調言』に載せたもの、もう1つは昭和3年(1928)3月発行の『文章俱樂部』に載せた「遅日雑話」の中の1編で、どちらも在りし日の羅文のエピソードを紹介しています。そこでは、羅文がブランデーを8杯飲んで「ブラハ」とあだ名されたこと、湯灌(亡くなった人の肢体を洗い清めること)を好んでした



朗月亭羅文(明治21年)

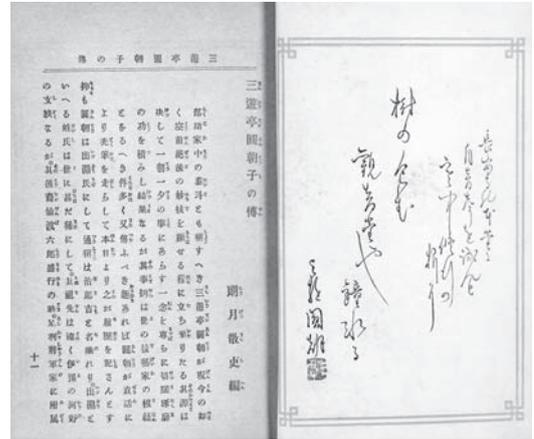
たこと、武術を好んで度々騒ぎを起こしたことなど、羅文の破天荒なエピソードが紹介されています。露伴は羅文について、明治20年代前半の文人間にあった不可思議な雰囲気の説明のために、「なくてはかなわぬ時代人であつた」と評しています。

羅文の生家は、根津八重垣町(現、根津二)で享保年間(1716-36)から続く酒屋「相模屋」でした。相模屋は、根津遊廓で消費される酒を一手に扱っていたとも言われる大店でしたが、羅文は次第に商売を離れていきました。

明治23年頃と思われる、露伴が坪内逍遙(1859-1935)に送った、羅文を居候させてくれるように頼んだ手紙があります。そこには「文事より外には取り所なきなれば」と、羅文が文人として身を立てていく積りであることや、『読売新聞』主筆の高田早苗(1860-1938)に頼んで読売新聞に雇ってもらおうと考えていることが書かれています。露伴の斡旋もあってか、明治23年3月頃から、朗月亭主人の投書が、『読売新聞』紙上に見られるようになります。

明治23年9月27日から11月20日まで24回に渡って、『読売新聞』紙上に朗月散史「三遊亭円朝の履歴」が連載されました。当時既に名人として知られていた三遊亭円朝(1839-

1900)の伝記を、本人からの聞き書きを中心にまとめた連載でした。露伴は、羅文と三遊亭円朝の仲が良かったことを紹介して、「確かに一顧に値ひする」ものであったと書いています。羅文の訃報を載せた『國會』明治24年8月21日号の記事でも、羅文の紹介を「嘗て讀賣新聞紙に朗月亭主人と號し三遊亭圓朝の傳を掲げ」と始めています。



『三遊亭圓朝子の傳』(明治24年)

明治24年9月、この「三遊亭円朝の履歴」に芳川春濤(1844-1924)が序文を付し、三遊亭円朝が本名の出淵次郎吉名義で、『三遊亭円朝子の傳』として出版しました。この本は、現在でも三遊亭円朝を研究する上で、必読の書とされています。しかしながら、朗月亭羅文の名前が忘れられていく中で、この本の作者も次第に曖昧になってしまいました。

本の出版から35年経った『東京朝日新聞』大正15年(1926)1月24号では、三遊亭円朝全集の刊行にあたることになった鈴木行三が、「古く朗月散史(朗月亭羅文か)」が読売新聞に三遊亭円朝の伝を連載したと書いています。この時には、既に研究者の間でも朗月散史が誰なのかが、曖昧になっていたようです。春陽堂から『圓朝全集』が刊行されると、昭和3年1月発行の13巻に収められた「三遊亭円朝子の傳」の解説には

この傳の筆者朗月散史は、或は採菊散人かと云はれ、或は朗月亭羅文かと疑はれて居りましたが、實はもとやまと新聞社に永く居た水澤敬次郎という人で、三友舎鈴木金輔氏が、向島で圓朝から其の傳を聞き、當時同舎の編輯員であつた水澤氏が筆記したものだと言ふことであります。

と記されました。この結果、現在では多くの研究者が、朗月散史は水澤敬次郎であったと考えているようです。全集刊行にあたって、調査が行われた結果だと思われそうですが、あるいは『やまと新聞』明治24年8月22日号附録に載った「三遊亭円朝略傳」との混同があるのかもしれませんが。読売新聞に記事を連載した朗月散史が羅文である以上、ほぼ同文の『三遊亭円朝子の傳』の作者も、朗月亭羅文であると考えべきでしょう。

もしかすると、刊行の翌々月に発表された露伴の「朗月亭羅文」は、『圓朝全集』の解説の誤りを、羅文を回顧する形で指摘したものであったのかもしれませんが。(加藤 芳典)

平成29年度のあゆみ

小・中学生のための歴史教室

「わがはい君魔法学校 歴史館で謎をとこう!」

◆7月15日(土)～8月31日(木) 参加者数……260人



歴史教室

特別展

「季節のうた -歌人 窪田空穂 生誕140年・没後50年-」

◆10月21日(土)～12月3日(日) (延べ38日間) 入館者数……2,859人

◆記念講演会

11月19日(日) 会場:文京区男女平等センター 参加者数……117人
「窪田空穂 -くらし・家族・うた-」

／臼井和恵氏(東京福祉大学教授・相模女子大学名誉教授)

◆展示解説 11月1日(水)、11月16日(木)



特別展

収藏品展

「コドモノマナビヤ -文京幼稚園今昔-」

◆2月10日(土)～3月18日(日) (延べ32日間) 入館者数……1,838人

◆展示解説 2月22日(木)、3月4日(日)、3月13日(火)



収藏品展

文の京ゆかりの文化人顕彰事業

◆朗読コンテスト

10月29日(日) 課題作家:夏目漱石 会場:跡見学園女子大学プロサラムホール
応募総数……294人 本選出場者……16人 観覧者数……264人

◆歴史講演会

11月2日(木) 会場:文京シビックホール(小ホール) 参加者数……326人
「幸田家のことば -露伴から受け継いだもの-」

／青木奈緒氏(エッセイスト・作家・幸田露伴曾孫)

◆史跡めぐり 「“慶応3年生まれ”のゆかりの文人を訪ねて」

12月13日(水) 参加者数……40人



歴史講演会

ミニ企画

◆3月22日(水)～6月25日(日) 「つげ櫛職人の道具 文京のものづくり2」

◆6月28日(水)～9月24日(日) 「ぶんきょうの海と山」

◆9月27日(水)～12月24日(日) 「露伴最初の弟子 朗月亭羅文」

◆1月5日(金)～3月18日(日) 「犬も歩けば」

◆3月20日(火)～3月25日(日) 「「切支丹屋敷」跡とシドッチ神父

—小日向一丁目東遺跡の調査—

※教育委員会主催



ミニ企画

史跡めぐり

◆第1回 6月16日(金) いにしへの旧区境を歩く -旧小石川區と日本郷區-
参加者数……48人

◆第2回 11月10日(金) 文京の文学史跡・文学碑を訪ねる
参加者数……29人

◆第3回 3月7日(水) 肥後細川庭園と関口・目白台の名所をめぐる
参加者数……52人



史跡めぐり

ワークショップ

「あなたの名所ものがたり」

◆第1回 '17ぼくたちわたしたち編(本郷・湯島)

8月8日(火) 会場:東京大学 参加者数……8人

◆第2回 '17本郷編

10月7日(土) 会場:東京大学 参加者数……12人

平成30年度の催し

※それぞれの事業の開催日時や募集方法等は、歴史館ホームページおよび「区報ぶんきょう」にて、お知らせします。

小・中学生のための歴史教室

この字がよめる？ わがはい君文字クイズ

7月15日(日)～9月2日(日)

夏休みに、館内の展示を見て答えるクイズを実施します。事前申込不要、参加者には記念品を贈呈。

特別展

ねこの細道・さんぽ道 ―ぶんきょう道中ひげ栗毛―

10月20日(土)～12月2日(日) ※11月3日(文化の日)は無料公開日

東京150年にあたる本年の特別展では、街道や路地裏を歩き来する猫の視点を参考に、区内に遺る様々な史跡や文化財をご紹介します。

記念講演会 11月18日(日)

会場:文京区男女平等センター

講師:今尾恵介氏(地図エッセイスト)

定員:100人、要申込(往復はがきにて)

史跡めぐり

歴史館友の会まち案内ボランティアが、区内の史跡等をご案内します。

年3回(6月、11月、3月)開催予定 要申込(往復はがきにて)

参加費 保険40円・入館料等実費

収蔵品展

ぶんきょういきもの大集合! ―生息地は収蔵庫―(仮)

2月9日(土)～3月17日(日)

ふるさと歴史館に収蔵されている資料の中から、「いきもの」にスポットをあてて様々な資料を展示します。

レファレンス(地域学習サポートコーナー)

毎月第2・4木曜日13時30分から16時30分まで、館内1階レファレンスコーナーにて、地域学習・調査に関するご相談に対応します。

文化人顕彰事業 朗読コンテスト

本選 10月28日(日) 13時～16時

会場:跡見学園女子大学 プロサラムホール

文京ゆかりの作家の作品を朗読。今年の課題作家は森鷗外、有島武郎、芥川龍之助、中勘助、宮沢賢治、山本有三です。

※参加者・観覧者募集の方法等は、ホームページなどでお知らせします。

文化人顕彰事業 歴史講演会

湯島小学校出身で、今年生誕150年を迎える日本画家・横山大観をとりあげます。

12月6日(木) 13時30分～

会場:文京シビックホール小ホール

講師:横山浩一氏(横山大観曾孫・横山大観記念館執行理事)

定員:300人、要申込(往復はがきにて)

文化人顕彰事業 史跡めぐり

10月頃実施予定 要申込(往復はがきにて)

参加費 保険40円・入館料等実費

ワークショップ あなたの名所ものがたり(東京大学との協働事業)

第1回 7月28日(土)・第2回 10月14日(日)

各回ともに13時～17時 要申込

名所や旧跡にまつわる個人の思い出やイメージをもとに、名所の新たなものがたりや魅力を創出していきます。

常設展示ボランティアガイド

ふるさと歴史館ボランティアガイドが、毎週土・日曜日、13時から17時まで常設展示の解説を行います(申込不要・無料)。

上記日時以外のご希望も受付ています。3週間前までに、文京ふるさと歴史館へ電話連絡し、申請書を提出してください。

利用のご案内

◆開館時間:午前10時から午後5時まで

◆休館日:月曜日・第4火曜日(休日にあたるときは翌日)

くんじょう期間、年末年始

◆入館料:一般個人100円、団体(20人以上)70円

中学生以下・65歳以上無料

*特別展は別に定めます

◆交通:東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」

から徒歩5分

都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分

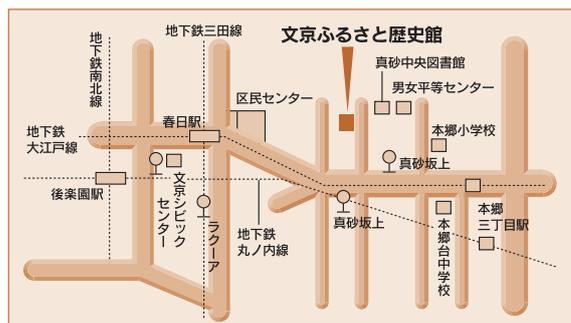
都営バス 都02 上69「真砂坂上」から徒歩1分

文京区コミュニティバスB-ぐる「文京シビックセンター」

または「ラクーア」から徒歩10分

◆ホームページ: <http://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/>

〒113-0033 東京都文京区本郷四丁目9番29号 電話(03)3818-7221



文京ふるさと歴史館